

「家守綺譚」

梨木 香歩著

主人公、綿貫征四郎の職業は文筆業。生活のために英語学校の非常勤講師をしていましたが、ひよんな事から、学生時代の親友高堂の実家の管理を任せられ、文筆業に専念するところから物語が始まります。文中の言葉遣いや、日常生活の端々から舞台は大正か昭和の初期でしょう。何となく現代のお話ではない様です。主人公の日常生活を綴っていて、「それってよくあることなの?」と思うような出来事がとても自然に描かれています。親友の高堂は学生時代に湖でボートを漕いでいて行方不明になったまま。その亡くなったはずの親友がやってくるのです。それも床の間に掛けられた「水辺の葦の風景画」の軸の中からボートに乗って。そんなことが実際にあれば、とても怖い。私だったら、たとえ大好きな祖母がそうやって出てきたとしても、やっぱり怖い。主人公はまるで「毎日会っている友達遊びに来た」という具合で普通に「おう」と迎え入れているのです。彼の管理している家には手入れはしていないが立派な庭があり、その庭にあるサルスベリが綿貫に恋をしていたり、疎水を利用して造ってある池で河童の抜け殻を拾うなど（あとで河童が返してもらいに来る）。自分がこんな体験したら大騒ぎをするような事が普通に起こります。丁寧な言葉とのんびりとした表現で怖くなく、違和感なく読めるのが面白い。家の中で読んでいるのに水の匂いや、草いきれを吸い込んだような気分になります。

F
N



新潮社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞